

平成22年3月31日現在

研究種目：基盤研究(A)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19252005
 研究課題名(和文) オーラルヒストリーの手法によるフィリピン開発主義体制の研究
 研究課題名(英文) Study on the Philippine developmentalist state by oral history
 approach: focused on the Marcos administrations

研究代表者

片山 裕 (KATAYAMA YUTAKA)
 神戸大学・大学院国際協力研究科・講師
 研究者番号：10144403

研究成果の概要(和文)：2007年4月から2010年3月の3年間に及ぶ海外学術調査であり、フィリピンにおいてマルコス政権の独裁体制に参加したテクノクラートへの聴き取り調査と、当時の資料を発掘・データベース化を行った。インタビューは、合計16名を対象に、延べ36回にわたって実施された。インタビューは映像・音声・文書の形で、デジタル化された発掘資料(シックス・ロハス文書、アーマンド・ファベリア文書)とともにフィリピン大学附属図書館で保管され、しかるべき時期に一般に公開される。

研究成果の概要(英文)：This project was an oversea research conducted between April 2007 and March 2010, mostly in the Philippines. Its main components were (1) series of interviews with those technocrats who joined Marcos administrations between 1965 and 1986, and (2) digitalization of the personal documents donated by Dr. Sixto K. Roxas as well as by Dr. Armand Fabella, (3) database production of fundamental information regarding the development of the Philippine technocracy such as the lists of cabinet members of each administration since the independence up to the present. All the collected data including video-taped interviews and the transcripts were kept and managed by the Main Library of the University of the Philippines, Diliman. They will be available for the general public in due time after clearing all the legal problems pertaining to the ownerships.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
2008年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
2009年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
年度			
年度			
総計	22,100,000	6,630,000	28,730,000

研究分野：東南アジア政治、比較政治

科研費の分科・細目：政治学

キーワード：オーラルヒストリー、フィリピン政治、マルコス政権、テクノクラート、テクノクラシー、開発体制

1. 研究開始当初の背景

マルコス大統領による独裁体制は、インドネシアのスハルト体制、マレーシアのマハティール体制、タイの開発主義体制と同様、権威主義と開発の体制を構築し、テクノクラートにマクロ経済運営と経済開発政策を担当させた。そうした上からの国家建設・経済発展の路線は、フィリピンではみごとに失敗した。しかし、テクノクラートが、当時なにを課題として、どのような政治的、経済的、国際的制約条件のもとで、どのように考えながら、どう行動したのかについての理解は、いまだにきわめて不十分である。しかるに、彼らの多くが高齢のため、次々と歴史の舞台から退場しつつある。こうした関係者へのインタビューを一日も早く実施しないと、われわれは、その歴史への証言を記録に留める機会を永遠に失ってしまう可能性が高いのである。これが本研究を企画した当時の背景である。

2. 研究の目的

(1)最大の目的は、マルコス政権に参画したテクノクラート(主に経済テクノクラート)へのインタビューであり、それを音声(+映像)によって記録し、かつそれを文字起こし長期間にわたって保存することである。

(2)第二は、フィリピンのテクノクラートについて基礎的なデータベースを作成することである。たとえば、独立(1946年)後の歴代政権の閣僚名簿といった基本的なデータもフィリピンにおいてはまとまって存在しない。これらを整備し一般の利用に供するようになりたい。

(3)第三は、こうしたインタビューや資料整備によってフィリピンの開発体制が東(南)アジアの他の開発体制と、何を共有し、何を共有していないかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1)聴き取りの対象となるテクノクラートは、そのほとんどが長く沈黙を守ってきた。マルコス政権をめぐる論争あるいは係争に巻き込まれたくないというのがその理由と推察された。そのため、彼らの信頼を獲得することが何よりも大事であるため、いくつかのチャンネルを通じて彼らにアプローチした。もっとも有効であったのが元首相であるセサル・ビラタ氏を通じたチャンネルである。ビラタ氏の信頼を得たことにより、次々と当時の主要閣僚がインタビューに応じてくれた。

(2)聴き取りは当初はフィリピン大学で行う予定であったが、人によっては自らの事務所などを好む人もあり、そうした場合はなるべく被聴き取り者の意思を尊重した。

(3)同時に欧米の主要大学でのオーラル・ヒストリー・プロジェクトを参考に、テープ起こし・文書化およびその公開に際しては、被聴き取り者の意思を最大限尊重し、本人が望まない部分については、すべて非公開もしくは条件付き(たとえば、20年後の公開)公開にすることとする。

(4)聴き取ったテープはプロジェクトのために雇用したRA(調査助手)二人がテープ起こしし、それをフィリピン大学社会学科のラウラ・サムソン教授が編集し最終版を作成した。さらに、その記録は被聴き取り者に送られ、彼らのチェックを受けた。

(5)被聴き取り者であったシクスト・ロハス氏、アーマンド・ファベリア氏から許可を得た膨大な個人文書(大統領との間の交換文書などを含む)はすべてフィリピン大学附属図書館でデジタル化を行い、同図書館のホスト・コンピュータに保管されている。

4. 研究成果

(1)聴き取り調査

聴き取りは、合計16名を対象に、延べ36回にわたって実施された。1回あたりの平均3時間である。このうち、元首相セサル・ビラタ氏の聴き取りは12回であり、現在、セサル氏の最終チェックを経て1年以内にフィリピンの代表的出版社Anvilより出版する予定である。ビラタ氏以外の聴き取り調査もすでに編集作業が終了している。

(2)インタビューはすべて録画されており、それとは別に音声でも記録されている。さらにすべて文書化されているが、これらはフィリピン大学附属図書館のアーカイブとして長期間保管され、しかるべき時に一般に公開される手筈となっている。

(3)マカパガル大統領期の重要テクノクラートであったシクスト・ロハス氏から、本プロジェクトは個人文書すべての寄贈を受けた。膨大な資料はすべてデジタル化されフィリピン大学附属図書館に保管され、1、2年以内に一般に公開される予定である。また、プロジェクトの最中に亡くなったアーマンド・フ

ァベリア氏の遺族から同氏の個人文書のデジタル化の許可を得た。ファベリア文書もロハス文書と同様にフィリピン大学付属図書館に保管され、近い将来一般に公開される。

(4) フィリピンが独立して、今日に至るまでの閣僚名簿などのデータベースも作成されたが、これもフィリピン大学付属図書館のデータベースとして近い将来公開される予定である。

(5) こうした成果については、2010年2月19日にフィリピン大学で開催されたフォーラムで報告された。関係者の多くが、本プロジェクトがフィリピンにおいて政治家・官僚に対してなされた初めての本格的なオーラル・ヒストリーの試みであると一致して評価してくれた。フォーラムに出席した Anvil 社の代表が成果の出版を申し出てくれたのも、そうした評価の表れのひとつである。

(6) 比較研究の観点からのフィリピン開発体制の分析については片山が2009年4月に開催されたフィリピン政治学会で報告し高い評価を受けた。プロジェクトの終了を受けて、成果の概要は2010年に筑波大学で開催される世界フィリピン学会日本大会でも紹介される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

(1) 白石 隆、分権と成長の民主主義—インドネシアの試み—、アステイオン、査読無、71号、2009、107-126

(2) 清水 展、南の島の小さな喜び：キルト作りをとおした内的発展、東南アジア研究、査読有、49巻1号、2009、119-121

(3) 清水 展、災害に立ち向かう地域／研究：生存基盤持続型の発展に向けた再想像＝創造のための素描、Kyoto Working Papers on Area Studies、査読有、No. 79、2009、1-20

(4) 清水 展、被災・すまいの変転・民族の新生：ピナトゥボ山の大噴火がもたらしたアエタ生存基盤の激変、すまいろん、2009年冬号、2009、34-37

(5) 白石 隆、日本のアジア外交を考えるために、外交フォーラム、2008年4月号、2008、60-63

(6) 中野 聡、カルメン・ゲレロ・ナクピルと『マニラの死』：『対象喪失』の同時代史をめぐる予備的考察、同時代史研究、査読無、1、2008、22-32

(7) 中野 聡、時が熟する——戦争の記憶をめぐって、HQ、査読無、21、2008、32-33

(8) ABINALES, Patricio Nunez, Fragments of History, Silhouettes of Resurgence: Student Radicalism in the Early Years of the Marcos Dictatorship, Southeast Asian Studies, Vol. 46 No. 2, 2008, 175-199

(9) SHIRAISHI, Takashi (with Hal Hill), Indonesia After the Asian Crisis, Asian Economic Policy Review, 査読有, 2-1, 2007, 123-141

(10) 白石 隆、〈特集〉インドネシア政治への新たな視座 序——インドネシア政治をどう考えるか、東南アジア研究、査読有、45-1、2007、3-36

(11) ABINALES, Patricio N., Mindanao in the Development Fantasy of the Philippine State, Journal of Southern Philippines, 29, 2007, 23-40

[学会発表] (計4件)

(1) 清水 展、資源としてのイフガオの棚田：世界遺産の相続者・流用者たちの思惑、日本国際文化学会・全国大会、2009年7月5日、佐賀大学(佐賀県)

(2) 清水 展、日本人高齢者のフィリピン・ロングステイ—夢と幻滅のあいだで揺れる人、狭間を生きる人—、International Symposium on “Interdependency of Korea, Japan and Southeast Asia: The Migration, Investment and Cultural Flow,” organized by Korean Association of Southeast Asian Studies, June 19-20, 2009, Gyeongsang National University (Korea)

(3) NAKANO Satoshi, The Lost City: Carmen Guerrero Nakpil and the Battle for Manila 1945, The 8th International Conference on Philippine Studies (23-26 July 2008) Session 6B: Comparing Empires, Remembering War: Spain, the U. S. and Japan in Philippine History, July 24, 2008, Escaler Hall, Ateneo de Manila University, Loyola Heights campus, Quezon City, Philippines

(4) KATAYAMA Yutaka, The Philippine Technocrats and the Authoritarian-Developmentalist Regime: An Oral History Project, 2008 INTERNATIONAL CONFERENCE OF THE PHILIPPINE POLITICAL SCIENCE ASSOCIATION, April 10-11, 2008, Siliman University, Dumaguete City, Philippines

[図書] (計26件)

(1) 片山 裕 (大西裕との共編著)、有斐閣、アジアの政治経済・入門 第2版、2010、300

- (2) 清水 展、風響社、「世界遺産の棚田村におけるグローバル時代の開発：フィリピン・イフガオ先住民の植林運動と国際協力」長津一史（編）『開発の社会史』、2010、319-356
- (3) SHIMIZU Hiromu, Singapore University Press, “Refiguring Identities in an Ifugao Village: Sketches of Joint Projects from a Filipino Filmmaker, a Native Intellectual, and a Japanese Anthropologist under American Shadow(s)” Fujiwara, Kiichi & Y. Nagano (eds.), *The Philippines and Japan in America’s Shadow*, 2010, (320p)
- (4) 片山 裕、明石書店、大野 拓司・寺田勇文（編）『現代フィリピンを知る 61 章・第 2 版』第 29 章、第 32 章、第 33 章、第 35 章、2009、142-145、156-160、161-164、169-172
- (5) 白石 隆、有斐閣、「インドネシアにおけるイスラーム主義とナショナリズム—イマム・サムドラの手記を手がかりとして」大澤真幸・姜尚中編『ナショナリズム論・入門』、2009、213-248
- (6) 白石 隆、ウェッジ、「東アジア地域システムをどう考えるか」松井孝典・松本健一編著『アジアは変わるのか』、2009、81-100
- (7) 清水 展、明石書店、大野 拓司・寺田勇文（編）『現代フィリピンを知る 61 章・第 2 版』第 1 章、第 11 章、第 24 章、第 37 章、2009、18-21、62-65、120-123、179-183
- (8) 中野 聡、日本評論社、「マニラ戦と南京事件」記録集編集委員会編『南京事件 70 周年国際シンポジウムの記録』、2009、152-162
- (9) 中野 聡、青木書店、永原陽子編『「植民地責任」論：脱植民地化の比較史』、2009、366-392
- (10) ABINALES Patricio N., University of Wisconsin Press, *The U.S. Army as an Occupying Force in Muslim Mindanao, 1899-1913*, in *Colonial Crucible: Empire in the Making of the Modern American State*, ed. Alfred W. McCoy and Francisco A. Scarano, 2009, 410-420
- (11) SHIRAIISHI Takashi and Pasuk Phongpaichit (eds.), *Kyoto University Press, The Rise of Middle Classes in Southeast Asia*, 2008, 307
- (12) SHIRAIISHI Takashi (ed.), ISEAS, *Across the Causeway*, 2008, 276
- (13) 清水 展、東京大学東洋文化研究所、「火山灰に消された歴史」東京大学東洋文化研究所編『アジア学の明日にむけて』、2008、188-193
- (14) 清水 展、弘文堂、「文化を資源化する意味付与の実践：フィリピン先住民イフガオの村における植林運動と自己表象」山下晋司（編）『資源化する文化』、2008、123-15
- (15) 中野 聡、人文会、人文会編『人文書のすすめ I V』、2008、59-72
- (16) ABINALES, Patricio Nunez, Anvil Publishing, *Joys of Dislocation: Essays on Mindanao, Region, Nation*, 2008, 215
- (17) ABINALES, Patricio Nunez (Nathan Gilbert Quimpo eds.), *Metromanila: Anvil Publishing Inc., The US War on Terror and Mindanao*, 2008, 210
- (18) ABINALES, Patricio Nunez, Institute of Southeast Asian Studies, “The Philippines: Weak State, Resilient President” in *Southeast Asian Affairs 2008* (Daljit Singh and Tin Maung Maung Than, eds.), 2008, 293-312
- (19) ABINALES, Patricio Nunez, Ateneo de Manila University Press, “Kahos Revisited: The Mindanao Commission and Its Narrative of a Tragedy” in *Brokering a Revolution: Cadres in a Philippine Insurgency*, edited by Rosanne Rutten, 2008, 144-187
- (20) ABINALES, Patricio Nunez, Kyoto University Press, “Notes on the Disappearing ‘Middle’ in Post-Authoritarian Philippine Politics” in *The Rise of Middle Classes in Southeast Asia* (Shiraishi Takashi and Pasuk Phongpaichit, eds.), 2008, 176-193
- (21) テマリオ・リベラ、東進堂、「日本フィリピン経済連携協定—開発と環境をめぐる論争」(Japan-Philippines Economic Partnership Agreement: Some Contentious Issues) 毛利勝彦編著『環境と開発のためのグローバル秩序』、2008、81-92
- (22) テマリオ・リベラ、風行社、フィリピンの社会林業とガバナンスの課題 (The Community Forestry Experience and Governance Issues in the Philippines) 西尾隆編『分権・共生社会の森林ガバナンス—地産地消のすすめ』(Forest Governance in a Decentralized Symbiotic Society: Local Product, Local Consumption)、2008、157-172
- (23) 清水 展、花書院、「辺境から中心を撃つ礫：アフガニスタン難民の生存を支援する中村医師とペンシャワール会の実践」松本常彦・大島明秀（編）『<九州>という思想—九州スタディーズの試み—』、2007、111-166
- (24) SHIMIZU Hiromu, Quezon City: Kultura’t Wika, Inc, “Imaging the Filipino Revolution 100 Years Ago: Japanese Dreams of Expanding the Territory to the Southeast.” in *Junctions between Filipino and Japanese: Transborder Insights & Reminiscences* edited by Azurin, Arnold ; Sylvano Mahiwo, 2007, 49-67
- (25) ABINALES Patricio N., Institute of

Southeast Asian Studies and Konrad Adenauer Stiftung, "Sancho Panza at Buliok Complex: The Paradoxes of Muslim Separatism" in Whither the Philippines in the 21st Century (Rodolfo Severino and Lorraine Salazar, eds), 2007, 277-312
(26) RIVERA Temario, CenPEG Books, "Political Corruption: An Analytical Framework," in Dissecting Corruption: Philippine Perspectives (edited by Bobby M. Tuazon), 2007, 7-14

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片山 裕 (KATAYAMA YUTAKA)
神戸大学・大学院国際協力研究科・講師
研究者番号：10144403

(2) 研究分担者

白石 隆 (SHIRAIISHI TAKASHI)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号：40092241

清水 展 (SHIMIZU HIROMU)
京都大学・東南アジア研究所・教授
研究者番号：70126085

中野 聡 (NAKANO SATOSHI)
一橋大学・社会(科)学研究科・教授
研究者番号：00227852

リヴェラ テマリオ (RIVERA TEMARIO)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：70338284

アビナーレス パトリシオ (ABINALES PATRICIO)
京都大学・東南アジア研究所・教授
研究者番号：60314267